

# 資料展示「被爆者を生き抜く： 資料から見えてくる兒玉光雄さん」

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部 助教 久保田 明子

放射線災害・医科学研究拠点に多大なご理解を賜り共催していただいた、2022年度の資料展示「被爆者を生き抜く：資料から見えてくる兒玉光雄さん」について報告する。

## 1. 展示企画経緯：兒玉さんと放射線医科学研究

今回のテーマとなった兒玉光雄氏は、広島市の被爆者であった。2020年の秋に亡くなった。

少し私事を書くことをお許しいただきたい。筆者は生前の兒玉光雄氏と直接会った回数は多くないが、最初の出会いは強烈であった。「今日はたまたま名刺を切らしているの、代わりにこちらを…」と言いながら彼から渡された紙片には大変驚いた。それは、放射線影響研究所（放影研）で解明された、兒玉氏の染色体異常を示すその染色体のカラー写真に、直筆でご自身の名前と連絡先を書き込んだものだった。私のあっけにとられている顔を、今思えば彼はちょっとにこっと見ていたようにも思う。少し茶目っ気があるというか、ウィットのある、スマートな人であったし、究極の個人情報の「名刺」であった。更に、こんなこと、つまり、被爆者の染色体異常の写真を名刺代わりに渡すというようなことは、当事者でしかできないことでもあろう。彼はまた、その「名刺」を使って、怒りや悲しみを大きく述べることはなかった。そこに逆に、怒りや悲しみの深淵を感じ、原爆の放射線による人体への影響とその医療に関する研究や動向に目を逸らさず、科学や科学者と対峙しようとする深意を見る思いであった。

兒玉光雄氏と放射線医科学との、ある意味「特別な関係」を感じた次の機会は、氏の葬儀であった。筆者は通夜に参列したが、その際、放射線被爆に関する医学研究に従事してきた重要な科学者を4名見かけ、少し驚いた。放影研の研究者2名、広島大学原爆放射線医科学研究所の研究者、広島大学名誉教授を一時に見かける被爆者の葬儀は、そうそうあるものではない。関係性はそれぞれとは思もの、やはり独特であると感じ、私は頂いた「名刺」を思い出した。

彼の死後、生前過ごした書齋に、あまり多くはなかったが、最後までずっと手元に置いていた資料が残された。兒玉氏は被爆者としての活動で著名であったが、妻の淑子氏はその資料の行方についてどうしようか困惑していた。広島には、こうした際、被爆者の方の資料を受け入れるアーカイブズがないからだ。広島平和記念資料館は、モノ資料を中心とする展示施設の役割が大きいので、記録文書類の受け入れはなかなか難しい。2022年冬、人を介してご縁を頂き、ご自宅に伺い、資料をお預かりした。

## 2. 兒玉光雄資料

兒玉光雄資料について、まずは概要調査を行い、内容を把握することとした。その結果が図1である。

以上から、一般的な被爆者と違って、以下のことが特徴的であると考える。

（特徴1）被爆者活動、平和活動以外の、自身の趣味（俳句作句、俳画作成、写真など）に関連する資料がある

図1 兒玉光雄資料概要（2023年2月現在）

【名称】	兒玉光雄資料
【形態】	ほぼ文書資料(手帳、書簡、文書、短冊、絵巻、写真など)
【数量】	500件以上(詳細は未調査)(段ボール6箱、紙袋1件)
【仮分類】	現在、以下の9分野に分けて整備中(再検討の予定) 分類①…自身の記録、証言(手帳/著作/著作英訳/その他出版) 分類②…自身の医療記録(診療記録など) 分類③…広島一中(友人/同窓会/慰霊祭) 分類④…平和活動(1)ピースポート 分類⑤…平和活動(2)伝承者事業/原爆の絵/記者間い合わせ 分類⑥…放射線影響研究所(海外学会参加/科学者との交流) 分類⑦…広島大学(大学文書館/原医研/科学者との交流) 分類⑧…俳句、俳画、写真 分類⑨…その他

(特徴 2) 自身の詳細な記録となる手帳が揃っている

(特徴 3) 自身の医療記録が多く保存されている

(特徴 4) 科学者との交流、特に放射線影響研究所の研究者および研究交流の資料が多く残る

(特徴 5) 被爆場所となった広島一中を中心とした、自身の同世代の被爆者に関する資料が多く残る

(特徴 6) 広島大学との関連を示す、珍しい資料が残る

(特徴 1) について…被爆者の資料は、手記以外は、比較的、被爆者としての活動(証言活動、反核運動、平和運動など)に関する資料が残ることが多い。もちろん兒玉さんもそういった資料を残しているが、それ以上に、原爆(被爆)と一見関係ない資料があった。特に高齢化が進む被爆者に対して最近強く見られる傾向だが、社会は被爆者に対し、被爆を語る「シンボル」であって欲しいと願い、場合によってはそうするように少し強制的に仕向ける状況がたまに見られる。「被爆者にこうあってほしい」と希望を持つことは自由であるが、「被爆者は被爆者らしく」と望まれることが多い結果、被爆者資料には原爆被爆に関係しない資料が残りにくい事情がある。その点、兒玉氏の俳句の短冊や海外旅行の写真などは、珍しい残り方でもある。

(特徴 2) について…会社員経験からなのか、年間手帳には、日々の予定や出来事について、時間、場所、誰と会ったか、要件などが多く書き込まれている。これは、他の資料の同定や調査をする際に大いに助かる、資料調査の羅針盤の役割を果たす。

(特徴 3) について…兒玉氏の資料の最大の特徴は、細かく残る医療関係の資料であるが、特に自身の健診結果等の記録、医師との連絡などは、兒玉氏の病歴を追うときに合わせてみると、被爆者の一生の医療の変遷がまた違った角度から確認できる可能性がある。兒玉氏は、若年で被爆した方に多くみられる「多重がん」であり、人生で20を超える罹患があった。残された医療記録には、あるがんとあるがんの手術の間に行われた検査結果などもある。個人情報、プライバシー保護の観点からその取扱いは緻密な配慮が必要ではあるが、被爆者の人生の医療の変遷を詳細にたどれる資料は希少であると考ええる。

(特徴 4) について…筆者が頂いた「名刺」からわかる通り、兒玉氏は、特に放影研とのかかわりを多く持った。放影研の歴史的背景から、一般的に多くの被爆者は放影研を嫌ったり避ける、交流しない傾向がある。兒玉氏もまた ABCC の時代に苦い思い出を持ち、当初から好意的に見ていたようでもなかったが、かれはそのうち、良い出会いを得て、良い関係性を持つこととなった。この事由だけでも希少な例である。また、このコミュニケーションは、科学と社会が目指す一つの形なのかもしれない。

なお、資料の概要調査と展示を終えた現在、この資料の中に見られる兒玉氏の静かな筆致から、自身の体に次々と起こる原爆放射線の影響についての探求を、原爆を投下した国(自分をそんな目に合わせた国)の研究者から始まった ABCC の後継機関である放影研の科学につける、という、

妻みを感じる。兒玉氏の冷静で率直な科学者への追及と放影研の兒玉氏への真摯な態度は、被爆者と科学の重要な一つの在り方であろう。

(特徴5について) …被爆時、広島一中の中で、建物のすきまに挟まれて身動きできなくなった兒玉氏は、次々と死にゆく多くの友を見送ることとなる。科学者との対峙の理由は、自身の体への影響だけでなく、こういった亡くなった友人、あるいは生き残っても苦しむ友人たちを考えてのことであるという。広島一中の夏の慰霊祭は現在も続けられているが、兒玉氏が晩年近くとなったときはコロナ禍であり、その開催が危ぶまれたことがあった。2020年、実施を決めかねていたスタッフのところに、兒玉氏が慰霊祭に参加するとの連絡が入った。すると、スタッフ一同「兒玉先輩が参加するというなら実施する」として決行したという。兒玉氏側だけでなく、広島一中の関係者側も、兒玉氏との関係が厚かったことがうかがえる。これに関する、書簡等の交流を示す資料がまた多く残っている。

(特徴6について) …兒玉氏は広島大学卒業である。その縁もあって、広島大学文書館が刊行する、広島大学卒業生のなかの被爆者に対するオーラルヒストリーの第1冊目に兒玉氏を選ばれ、刊行された(兒玉光雄著/広島大学文書館編『原子野を生きのびて』2009年刊行)。これはその後続刊が出ており、広島大学の原爆に関する重要な事業の一つの開始であった。また、広島大学の開講する「平和科目」のうち、原爆放射線医科学研究所(原医研)が担当している科目「医学からみた戦争と平和」の中で講義を担当してくださった。大変残念なことに、兒玉さんが医学部の学生と直接交流する対面での講義はあまり実現しなかった。亡くなる年の2020年、対面の講義が再開した際には、今度は兒玉さんの体調がままならず、結果、講義の模様を映像に撮り、それを講義時間

に流すこととなった。そしてその年の秋に兒玉氏は亡くなる。よって、広島大学医学部の学生に向けての講義のその映像が、最後の兒玉氏の証言となった。そしてその映像が広島大学の「名講義100選」の1つに選ばれたことで、兒玉氏の姿は、広島大学の番組を通して、長く、多くの皆さんに視聴できる体制となった。

これらの資料状況から更に焦点を絞るとすれば、やはり、「医療記録」と「科学研究所との放射線の人体の影響に関するやり取りの記録」が非常に貴重であろう。先に述べたように、全体でわずか段ボール6箱程度の資料は、決して多くない。そのなかで、上記の医学に関する資料の割合は比較的高い。また、自身の感情を吐露するような、エモーショナルな記述があまり見られない中、20を超える多重がんと闘いながら、自身と友を蝕んだ原爆放射線に関する科学的解明を望む趣旨の言葉を、放影研の資料をまとめている封筒に強調して書いている個所があった。そうした経験を経て迎えた晩年、今度は被爆者となった自身から、医学を学ぶ、後輩の学生に向けてその講義を行った。奇しくも、広島大学医学部がある霞キャンパスの地域は兒玉氏が幼少のころ一時住んでおり、「トンボをよく追いかけた」と思い出を語っている場所でもある。そういった場に戻ってきて最晩年に講義を行う。これはまさに「被爆者を生き抜く」ということだ。

以上のような特徴から、原医研でお預かりし、分析することは意義があるとして、必要な手続きを経て資料を原医研に移管し、現在、その整備を実施しているところである。

### 3. 兒玉光雄資料の展示

兒玉資料の、小規模ながらも、被爆者の医療記録を含む、広島大学とも関連の深いコレクションの意義は十分に理解できたが、展示の時期は、本

来はもう少し分析が進んでからすべきところでもあった。また、被爆者の個人の資料展示については、多くの検討、配慮が必要であると考えていたため、なかなか決断できなかった。

懸念の1つは、「個人の資料を扱うことの難しさ」である。被爆者高齢化の現在、被爆者の一言一句、あるいは活動はその重みを増している。そのなかで、一口に原爆被爆者と言っても、その生き方や生き様は多様であるので、ある特定の人のみを象徴的に挙げて、それをもって「被爆者」全体を語る、ということはなるべく避けた方が良くように考えた。そこで、そういった誤解が生まれないように、まずはその主張をパネル等でも明記し、理解を求めることとした。

2つ目は、どのように兒玉さんを展示を通して語るか、の問題である。多くの取材を受け、被爆体験伝承者の育成や自らの証言活動にも積極的だった兒玉さんについては、既に多くが語られている。そんななか、展示で新たにできることはあまりないとも思えた。しかしながら、そこについては、逆に、「資料から見えてくる」という点に力点を置くこととした。これは、アーカイブズ学として取るべき態度でもある。幸い、本資料群には「被爆者としての兒玉さん」ではない部分を示す資料が比較的多くあった。兒玉さんへの多角的な視点を示す展示は可能と考え、実施を決めた。

時期が早い、という問題は、非常に重く考えた。しかしながら、ロシアのウクライナ侵攻などによる核兵器使用や原発事故などへの危機感の高まりを見せる情勢のなか、若年層が被爆した場合に起こる可能性のある、急性障害、いつ症状が出るかもしれないという不安との闘い、晩発性の症状(兒玉氏の最初のがんは60歳であった)、多重がんの罹患といった、医学的な暴力ともいえる状況を社会に発信することは意義があると考えた。

その考えのもと、兒玉さんの人生をたどりなが

ら、その特徴的な資料を厳選し、展示した。最近までご活躍されていた方であるため、多くの資料には現在も活躍する関係者の情報が多く含まれていた。そのため、その場合は個人情報保護やプライバシーに十分配慮し、基本そういった資料は展示をしないようにした。結果、その点は参観者に「もっと開示してほしい」との感想をいただくこととなるが、これは崩すことはできない点である。

### 3. 反響など

被爆者運動や平和活動を積極的に行ってきた兒玉氏は、この界限では大変著名であるうえ、ファンも多かったため、展示には多くの方々が来てくださった。ただ、そのなかで、今までの企画展には見られなかったリアクションを頂戴したところがあった。

上記の展示のチラシは、兒玉氏のオーストラリア旅行時に奥様が撮影した写真を使用した。この写真については違和感を覚えた方がいたようだ。恐らく、例えば原爆ドームを背景にきりっとした「被爆者らしい」兒玉さんの姿ではなかったからかと想像する。そこは予測の範囲ではあったが、本当にそのお声を聞いたときはやはり驚き、現在の広島における被爆者に対する期待や圧の在り方を思った。一方で、兒玉氏に近い方からは「被爆者がいつも健康不安に怯えているだけではなく、楽しく明るい日々も過ごしているという救いになるような」との言葉を頂戴した。我が意を得た気持ちになる。そしてまたそれは「兒玉光雄資



料」の最大の特徴を端的に示してもいた。

また、芳名録などから、原爆報道の記者や被爆者の方の来訪も知った。特に被爆者の方の中では、感情的になる方もおられた。それは展示の未熟さ、説明の足りなさに起因すると反省している。これは申し訳なくも思い、またじっくり見て頂いた証でもあるともとらえた。

また、何度も足を運んでくださる方も見られた。比較的多く聞いたのは、「これは今後も公開してくれるのか」「そのうち活用できるようになるのか」といった、資料利用についての要望である。それは、一般の方、被爆者の証言運動を支えている方から研究者、マスコミ関係者まで、いろいろな立場の方からあった。

医学研究者、医療従事者、医学部学生の来室も確認できた。特に医学部の先生方や学生さん、また大学の職員の方々なども多く来てくださった。これはまた非常に嬉しくありがたかった。ただ、その方々のなかからは、医療関連の資料の充実や、その医療記録の研究（分析）を望む声もあった。これは私にはできないことであるが、もしこういった資料を今後展示で検討する際、関連する分野の医学研究者や医師からのご助言など賜れば、ますます、広大医学部らしい、また原医研らしい展示にできる可能性があるとも思った。しかし、同時に、大変多忙な研究者や医師への協力依頼のハードルは大変高く、困難であるとも考える。

#### 4. 海外の大学関係者の参観（ベルギー、ルーベン大学）

ベルギーの歴史あるルーベン大学では、歴史系のセクション、特に大学院の教授を中心に、提携校を探しに「日本縦断ツアー」を計画した。残念ながら、広島大学はその候補には入っていなかったが、たまたまそのオーガナイザーが友人であったことで、福岡から京都に向かう“通りすがり”

に広島に立ち寄ってくれることとなった。そこで、原医研で学术交流の研究会を実施したのだが、その際、医学資料館全体とこの企画展を皆さんにご覧いただくこととした。

メインは研究会であったため、当初はあまり時間をかけない予定であった。しかしながら、案内が進むにつれ、まずは医学資料館そのものの展示に大変関心を持ってくださり、企画展に入ると、更に熱心に話を聞いてくださり、次々と質問を受けることとなった。特に、兒玉さんの人生（若年時に放射線を受けることの影響に関する医学の問題）には高い関心を持たれ、また原爆そのものから現時点での放射線医科学研究の状況や今後についてなど幅広い関心を寄せてくださった。対応する私が不適格者であり申し訳なく思うと同時に、こういうときにも放射線災害の問題の研究交流について医学研究者、医師のご協力を得られたら、夢のようだと思った。海外の大学や研究機関の研究者は、広島や長崎に原爆が落とされた事実は知っていても、それに関する細かい科学的な知識については、知る機会が少ない。しかし、彼らは実はかなり積極的に知りたいのだ、と実感した。

また、ルーベン大学では、創立300年を記念して医学・科学を中心とした博物館を設立中であるのだが、今回のツアーには、その担当者の教授がいらっしやった。彼女は、筆者のところにインターンを送りたい、また研究連携や学生交流などのプロジェクトなどを今後できないか、との話を持ち掛けてくださった。上記のほとんどは、日本語と英語とドイツ語が堪能な友人のヤン・シュミット教授の多大な助けがあったからこそその話の展開であり、心より感謝している。彼もまたとても充実したと言い、上記の博物館事業とはまた別に、同大学の日本学コースで原爆や放射線被災の問題を取り入れられないか考えたいと話した。

つまり、つたない展示ではあるが、拠点の共催

を得られて、大学の医学部に属する医学資料館で、客観的であること、科学的であること、学術的であることに留意しつつも、一方であまり専門的になり過ぎず、わかりやすく展示を行っていくことは、海外の研究機関でも、現在の関心事としてニーズがあるのだと分かった。ベルギーはNATOの本部があり、ロシア侵攻の現場や狙われる原発はさほど遠くない。歴史学的関心、日本学的関心だけでない要素が強くあることを実感した。

改善点、反省点は数多くあるものの、やはり今回も得ることの多い展示となった。それもまた多くの関係者の皆様、特に今回は、兒玉光雄氏の奥様である兒玉淑子様の多大なご理解によるところである。淑子様は本当に何度も足を運んでくださり、多くの方にご紹介くださった。兒玉光雄さんは被爆者として生き抜いたが、淑子さんあっての人生であり、淑子さんもまたご自身の人生を生き抜いていると強く感じた次第である。

【関連図表】




(兒玉光雄) 写真 (昭和17) (兒玉光雄) 写真 (昭和31)

**兒玉光雄年譜**

1932年(昭和7)9月24日 広島市荒神町に生まれる  
 1939年(昭和14)4月 比治山尋常小学校入学  
 1945年(昭和20)4月 広島県立広島第一中学校入学  
 8月6日 広島県立広島第一中学校にて被爆(直爆)  
 8月10日 友人を探す従兄弟のために広島市に入る(入市被爆)  
 1946年(昭和21) 向原町に転居(現安芸高田市向原町長田)  
 1951年(昭和26)3月 学区制導入で編入した向原高等学校を卒業  
 1953年(昭和28)4月 広島大学水産学部入学  
 1957年(昭和32)3月 広島大学水産学部卒業後、向原町役場に就職  
 1962年(昭和37)2月 農林省(当時)外郭団体国際農林友会による派遣事業でスイスへ(1年8か月)  
 1966年(昭和41)5月 向原町農協職員として大草田牧場の牧場長に就任  
 1971年(昭和46) 西武化学工業(西武流通グループ)に就職  
 1982年(昭和57)6月 「被爆者健康手帳」取得  
 1993年(平成5)夏 広島転動を機に受診した人間ドックで大腸がん発見/手術後、退職  
 1995年(平成7) 胃がん手術  
 1997年(平成9) 皮膚がんを手術(以後手術18回)  
 1998年(平成10) 「被爆者証言ビデオ」収録(No.594)  
 2002年(平成14) 甲状腺がん手術  
 2005年(平成17)8月6日 NHKスペシャル「被爆者命の記録」放送  
 2008年(平成20)11月 放射線影響研究所を訪れ検査、染色体の異常を知る  
 2009年(平成21)3月 広島大学文書館よりオーラル・ヒストリー「原子野を生きのびて」刊行  
 2010年(平成22)4月 「被爆者証言者」となる/ピースボートに参加  
 2011年(平成23) 広島市立基町高等学校「原爆の絵」制作に協力  
 2013年(平成25)4月 広島市の被爆体験伝承者事業に参加  
 2014年(平成26)3月 兒玉光雄「被爆者・ヒロシマからのメッセージ」を自ら刊行  
 2016年(平成28)3月 自著の英訳版「HIBAKUSHI: A-bomb Survivor」を刊行  
 10月 第62回米国防放射線影響学会共同開催の第22回放射線と健康に関する会議: 隔年合会(ハワイ)で講演  
 2017年(平成29) 腎臓がんと骨髄形成症候群(MDS)発症  
 2019年(令和元)2月 「被爆者証言ビデオ」再収録(No.1083)  
 4月 広島平和記念資料館の情報端末に傷ついた染色体の画像が掲載される  
 7月 広島大学平和科目(原医研担当)「医学からみた戦争と平和」講義  
 2020年(令和2)6月-7月 広島大学平和科目(原医研担当)「医学からみた戦争と平和」収録(最後の証言)  
 7月26日 広島一中慰霊祭に申しすで出席/その夜広島大学病院に緊急入院  
 9月 病床から被爆体験伝承者実習生2名育成(後日認定)  
 10月28日 左腎細胞がんのため死去(享年88)

図2 兒玉光雄氏年譜

表 兒玉氏のがん罹患履歴

回数	西暦	和暦	月	日	病名	病院	備考・出典
1	1993	平成5	9		大腸がん	広島記念病院	医療資料 診断書
2	1995	平成7			胃がん		『被爆者』(2014)など
3	1997	平成9			皮膚がん(1)	県立広島病院	『被爆者』(2014)など
■	1998	平成10	7	24	皮膚がん	県立広島病院	医療資料 診断書
4	1999	平成11	2	12	皮膚がん(2)	県立広島病院	医療資料 診断書
5	2000	平成12	5	26	皮膚がん(3)	県立広島病院	医療資料 診断書
6	2000	平成12	11	10	皮膚がん(4)	県立広島病院	医療資料 診断書
7	2001	平成13	2	19	皮膚がん(5)	県立広島病院	医療資料 診断書
8	2002	平成14			甲状腺がん		『被爆者』(2014)など
9	2003	平成15	5	16	皮膚がん(6)	県立広島病院	医療資料 診断書
10	2003	平成15	6	20	皮膚がん(7)	県立広島病院	医療資料 診断書
11	2004	平成16	1	9	皮膚がん(8)	県立広島病院	医療資料 診断書
12	2004	平成16	11	26	皮膚がん(9)	県立広島病院	医療資料 診断書
13	2005	平成17	6	24	皮膚がん(10)	県立広島病院	医療資料 診断書
14	2005	平成17	10	7	皮膚がん(11)	県立広島病院	医療資料 診断書
15	2007	平成19	2	2	皮膚がん(12)	県立広島病院	手帳 2007年
16	2007	平成19			皮膚がん(13)	県立広島病院	『被爆者』(2014)など
17	2010	平成22			皮膚がん(14)	県立広島病院	『被爆者』(2014)など
18	2011	平成23	3	11	皮膚がん(15)	県立広島病院	手帳 2011年
19	2011	平成23			皮膚がん(16)	県立広島病院	『被爆者』(2014)など
20	2011	平成23			皮膚がん(17)	県立広島病院	『被爆者』(2014)など
21	2014	平成26			皮膚がん(18)	県立広島病院	
■	2017	平成29	4		甲状腺がん	安芸市民病院	医療資料 診断書
22	2017	平成30	3		腎臓がん	広島大学病院	
23	2020	令和2	10	28	左腎細胞がん	県立広島病院	

【被爆状況】 直接被爆・入市被爆  
 【被爆時期】 1945年8月6日  
 1945年8月10日  
 (広島市内を歩く)  
 【被爆地点】 爆心より876m  
 【被爆場所】 教室棟屋内(7.8クレイ)  
 (瓦葺き木造平屋建)  
 【遮蔽効果】 放射線透過率59%  
 【被爆線量】 4.6グレイ  
 (以上、「被爆体験調書(2012年)等」より作成)

図3 兒玉光雄氏の被爆状況